

# 教育研究業績書

2016年10月01日

所属：生活環境学科

資格：教授

氏名：瀬口 和義

研究分野	研究内容のキーワード
染色化学、有機光化学、機能性材料科学	ヘテロ環、色素、光触媒
学位	最終学歴
理学博士, 理学修士	京都大学大学院 理学研究科 化学専攻 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 保存科学	1998年3月	服飾保存科学のテキストとして自費出版した。(pp1~57)
2. Deutsch fuer Anfaenger	1997年4月	科学ドイツ語のテキストとして自費出版した。(pp 1~54)
3. 図説化学基礎・分析化学	1994年10月	機器分析のテキストとして執筆した。
4. 基礎物理化学	1990年3月	物理化学のテキストとして自費出版した。(pp 1~86)
5. 素材の管理科学	1989年9月	繊維加工学のテキストとして自費出版した。(pp1~102)
6. 加工剤分析	1989年9月	加工剤化学・加工剤分析実験のテキストとして自費出版した。(pp 1~174)
7. 改訂版現代の一般化学	1989年1月	基礎化学Ⅰ、基礎化学Ⅱのテキストとして、初版を大幅に改訂した。
8. 化学実験	1983年3月	化学実験のテキストとして自費出版した。(pp1~132)
9. 現代の一般化学	1982年1月	基礎化学Ⅰ、基礎化学Ⅱの教科書としてまとめた。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. ひょうご大学連携「ひょうご講座」講師	2007年10月	人と生活環境—衣住環境から都市環境まで
2. 神戸大学教育研究センター非常勤講師	2001年10月~2008年2月	医学部の1年の学生に基礎有機化学の講義
3. 神戸大学理学部非常勤講師	2000年4月~2001年9月	理学部化学科1年の学生に基礎有機化学を講義
4. 神戸大学理学部非常勤講師	1993年10月~1995年3月	理学部化学科3年の学生に特別講義
<b>4 その他</b>		
1. 兵庫県教育功労賞	2012年5月3日	
2. 兵庫県私学連合会創立60周年記念永年勤続者表彰	2010年11月6日	
3. 文部省大学設置学校法人数員組織審査	1996年8月	科学ドイツ語 可の判定
4. 文部省大学設置学校法人数員組織審査	1993年8月	服飾保存科学、加工剤化学、卒業基礎研究、卒業論文可の判定
5. 文部省大学設置学校法人数員組織審査	1990年1月	被服保存化学特論 D〇合

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		
1. 13食博覧会大阪 出展 実行委員長	2013年4月26日~2013年5月6日	2013年4月 食博覧会大阪に大学として2回目の出展
2. 家政学会第61回大会 実行委員長	2009年8月	
3. 09食博覧会大阪 出展 実行委員会顧問	2009年4月	食博覧会に大学として初めて出展
4. 日本人間工学会関西支部大会 会長	2006年12月	
5. Research Award	2001年4月	Fading of azo dyes with sodium sulphite の研究で The Society of Dyers and Colourist から論文賞の受賞
6. 関西サイエンス・フォーラム「異文化交流懇話会」委員	2000年9月~現在	
7. 大学実験室安全対策特別委員会委員 (日本化学会)	1995年7月~1996年8月	阪神淡路大震災の被災状況の調査と安全対策の提言
8. 野津奨励賞	1983年5月	「光及び熱による励起反応」の研究で野津奨励記念会から受賞
9. 日本衣料管理協会専門委員会委員	1978年4月~1990年3月	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 生活を科学する	共	2014年3月	光生館	横川公子、瀬口和義 編著 序章及び第1章～5章から成る。序章：毎日の暮らしを科学の目でとらえるの項を執筆(pp1～13)。
2. 生命倫理に基づく環境と生命の科学的研究	共	2006年12月	平成15年度～平成18年度文科省大学院整備重点経費研究科特別経費研究成果報告書	瀧井幸男、小野木禎彦、牛田智、瀬口和義 平成15年度～平成18年度文科省大学院整備重点経費研究科特別経費により4名が研究した成果の公表である。瀬口は、「ヘテロ環化合物の生体活性に関する研究」を分担した。
3. 高分子辞典	共	2005年06月	朝倉書店	瀬口和義他 高分子科学・技術・工業の全領域およびその周辺領域をカバーする辞典で、項目数を第2版より大幅に増やし、約5200項目とした。
4. 実験化学講座5 化学実験のための基礎技術	共	2005年02月	丸善	市村 禎二郎(編者)、瀬口 和義、他32名 第4版を踏襲して化学実験の基本操作をていねいに解説した。執筆部分は微量成分の分離と精製の中で、溶解・沈殿・ろ過・透析、乾燥と保存、帯融解法である。(pp.23～52)
5. 大学実験室安全対策特別委員会報告書	共	1999年12月	日本化学会	生越・南・池田・小久見・井上・大橋・龍谷・勝村・鴻池・澤本・白井・瀬口・瀬恒・廣井 他7名 阪神大震災による大学、研究所における被害状況の調査と将来の地震対策の検討を行ない、日本化学会に報告した。担当(pp.65～75)
6. 染織文化財の展示、保存、管理に関する基礎的研究	共	1999年03月	平成9, 10年度科学研究費補助金(基礎研究B(1)) 研究成果報告書	齊藤・瀬口他7名 (分担部分)天然染料の大気汚染物質による変退色—シクロデキストリンによる防止効果— 大気汚染物質の一つである亜硫酸ガスまたはその水溶液である亜硫酸は反応性が高く、染料や染色布の退色を起こすことが知られているが、その防止は必ずしも容易ではない。本研究は退色防止剤として、シクロデキストリン(CyD)を選び、天然染料(クルクミン)及びアゾ染料を用いて、亜硫酸ナトリウム水溶液による退色速度に及ぼすCyDの効果を検討した。染料の退色は染料の構造によって異なるが、共役エミノンに対する亜硫酸の付加(C-付加)、及び共役イミノンに対する亜硫酸の付加(N-付加)の2種に大別にできた。いずれの付加においてもCyDの添加による退色の抑制効果について、置換基効果、CyD空洞への染料取り込みの深淺、染料の反応部位、結合定数(Ka)から考察した。
7. 洗剤および染料の環境中における消失	共	1997年3月	平成7, 8年度科学研究費補助金(基盤研究(A)総合(1)) 研究成果報告書	片山、瀬口他6名 (分担)染料の光分解による消失
8. 図説 化学基礎・分析化学	共	1995年10月	建帛社	辻村・吉田・有田・宇高・笠井・亀田・瀬口 生物化学基礎系を専攻する学生、社会人のために「実験を含む化学・分析化学」の基本と新しい考え方を図説したものである。(pp.93～109, pp.184～201)
9. 生活環境保全を目的とした洗浄システムの開発に関する研究	共	1993年03月	1992年 科学研究費(総合研究A) 研究成果報告書	藤井・瀬口 他9名 汚れモデルとして、酸性染料またはナフトール染料を用いて市販の次亜鉛素酸ナトリウムによる漂白酸化を界面活性剤存在下での漂白速度、および酸化生成物の分析の両面から検討した。
10. 第4版実験化学講座1 基本操作	共	1990年11月	丸善	日本化学会編 荒木他28名 講座全30巻中の第1巻。大学院初級の学生に対して、実験室で直ちに役立つということを主眼にしている。分担執筆部分は第4章物質の分離と精製である。 分担：瀬口 (pp.184～213)
11. 改訂版現代の一般化学	共	1989年01月	培風館	丸山・石沢・瀬口・富田 著書「現代の一般化学」を大幅に改訂した。基本的な考え方は旧版と変わらないが、第2部の有機化学の基本をより理解しやすいように改め、第3部化学と生活については実生活とのかかわりをより強調した。 分担：瀬口 (pp.3～83, 151～209, 232～258)
12. 新版 品質管理のための繊維製品の基礎知識	共	1985年2月	日本衣料管理協会	内山他17名 内容は3分冊からなる。第1分冊は繊維製品の品質管理・繊維に関する一般知識、第2分冊は家庭用繊維製品の製造と品質、第3分冊は家庭用繊維製品の流通、消費と消費者問題である。繊維、糸及び生地、その他の試験法の項を分担執筆した。 分担：瀬口 (pp.197～199)
13. 品質管理のための繊維製品の基礎知識	共	1982年04月	日本衣料管理協会	伊藤他35名 内容は3部からなる。第一部は繊維製品に関する一般知識、第二部は家庭用繊維製品の製造と品質、第三部は家庭用繊維製品の流通、消費と消費者問題で

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
14. 現代の一般化学	共	1982年01月	培風館	ある。繊維、糸、布製品の試験法、評価の項を分担執筆した。 分担：瀬口 (pp. 319~322) 丸山・石沢・瀬口・富田 生活と化学とのかかわりが理解できるようにまとめた大学教養課程の現代化学教育の教科書である。物質とエネルギー、有機化学の基本、化学と生活の3部からなる。 分担：瀬口 (pp. 3~79, 153~208, 231~256)
<b>2 学位論文</b>				
1. Diels-Alder反応に関する研究	単	1976年5月	京都大学学位論文	
2. 芳香族親電子置換反応に及ぼす溶媒効果、圧力効果	単	1971年3月	京都大学修士論文	
<b>3 学術論文</b>				
1. 茶殻の金属処理によるアンモニアの消臭効果	共	2014年3月	武庫川女子大学紀要、自然科学編 61巻	(宮本佳澄美・瀬口和義) 茶殻の有効利用のため、茶殻のアンモニア吸収性について検討した。茶殻は一定量のアンモニアを吸収したが、茶殻を金属処理することによりアンモニア吸収性が著しく増大することを見出した。
2. Crystal Structures of Heterodi quinane Containing a Triazine, an Indoline, and Pyrrolidine Skeletons Prepared by Photoreaction of 7-Methoxy-3-[(1-methoxyimino)ethyl]-N-phenyl-1,2-dihydrocinnoline 1,2-Dicarboximide with Diethyl 1,3-Acetoned edicarboxylate	単	2013年3月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. Vol. 60	Kazuyoshi Seguchi 表題の化合物の結晶構造および立体構造をX線構造解析により明らかにした。
3. Crystal Structures of Heterodi quinane Synthesized by Photoreaction of Diethyl 1,3-Acetoned edicarboxylate with 7-Methoxy-3-[(1-methoxyimino)ethyl]-N-phenyl-1,2-dihydrocinnoline 1,2-Dicarboximide	共	2011年03月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. Vol. 58	Kazuyoshi Seguchi, Satoko Tanaka 表題の化合物の結晶構造および立体構造をX線構造解析により明らかにした。
4. Crystal Structures of (E) and (Z)-isomers of 7-Methoxy-4-methylamino-3-[(1-methoxyimino)ethyl]-N-phenyl-1,2,3,4-tetrahydrocinnoline 1,2-Dicarboximide	共	2010年03月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. Vol. 57	Kazuyoshi Seguchi, Satoko Tanaka 表題の化合物の(E)、(Z)異性体をX線構造解析により、その構造を決定した。
5. Crystal Structure of a 6-Hydroxynaphtho[2,1-b]-3H-1,4-thiazin-2(1H)-one Derivative	共	2009年03月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. Vol. 56	Noriko Itoh, Satoko Tanaka, Kazuyoshi Seguchi オレンジIとチオグリコール酸から合成した表題の化合物をX線による単結晶構造解析を行ない、構造を決定した。
6. 酸化チタン存在下メタノール中でのアゾベンゼン類の光反応	共	2008年3月	武庫川女子大紀要(自然科学) 55巻	松山ときわ、田中沙和子、瀬口和義 酸化チタン存在下メタノール中で4種のアゾベンゼンを照射したところ、酸素雰囲気下、酸性条件でテトラフェニルテトラアザシクロヘキササンが生成した。一方、窒素雰囲気下では、ジ(1,2-ジフェニルヒドラジニル)メタンとヒドラジベンゼンが生成した。この反応はヒドラジニルラジカルを経由して起きると推定した。
7. Formation of Naphtho[2,1-b]-3H-thiazin-2(1H)-one Derivatives by Reactions of 4-Arylazo-1-naphthols with Mercaptocarboxylic Acids	共	2007年3月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. Vol. 54	Noriko Itoh, Satoko Tanaka, Kazuyoshi Seguchi 4-アリアルアゾ-1-ナフトール類とメルカプトカルボン酸類との反応で中程度の収率でタイトルの化合物を得た。その構造は各種スペクトルデータ及び化学変換により決定した。反応はアゾナフトールに対するマイケル付加と分子内環化により生成すると推定した。
8. Crystal Structure of 3-[(Ethoxycarbonylmethyl)thio]-1,2,3,4-tetrahydronaphthalene-1,2,4-trione 2,4-Diphenylhydrazone	共	2007年1月	Analytical Sciences, Vol. 23	Satsuki Abe, Kazuyoshi Seguchi 2,4-ジフェニルアゾ-1-ナフトールに対するメルカプト酢酸エチルのマイケル付加で得られた標題の化合物の立体構造をX線構造解析により決定した。
9. Crystal Structure of 1,2,4,5-Tetra(3-methylphenyl)hexahydro-1,2,4,5-tetrazine	共	2007年06月	Analytical Sciences, Vol. 23	Tokiwa Matsuyama, Kazuyoshi Seguchi 3,3-ジメチルアゾベンゼンのメタノール溶液に酸化チタン存在下で照射して得られた標題の化合物の立体構造をX線構造解析により決定した。
10. 酸性雨モデルとしての希硝酸によるアゾ染料の異常退色	共	2006年3月	武庫川女子大学紀要(自然科学) 53巻	中山直美、木戸紀子、瀬口和義 酸性雨モデルとして希硝酸によるアゾ染料の退色を30°Cで、分光光度計により測定した。4-アリアルアゾ-1-ナフトールや4-アリアルアゾアニリンでは、退色に誘導期間がみられた。窒素酸化物の定量、退色生成物の同定から、この異常退色は、窒素酸化物による自触媒反応であると結論した。
11. Crystal Structure of 2,5-Di(3,4-dimethoxyphenyl)-8,8-dimet	共	2004年12月	Analytical Sciences, Vol. 20	Seguchi, K. and Matsumoto, K. クルクミンのパーマチル化物を酸素雰囲気下、アセ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
hyl-3, 4-dioxabicyclo[4.3.0]nonane-7, 9-dione				トニトリル中で光照射したところ、標題の2環性パーオキシドが生成した。その立体構造をX線構造解析のより決定した。
12. Crystal Structure of 6-Chloro-2-ethoxy-13-methoxy-12-methyl-11-phenyl-9, 11, 13, 15-tetraazatetracyclo[7.6.0.0<sup>1,12</sup>.0<sup>3,8</sup>]pentadeca-3, 5, 7-triene-10, 14-dione	共	2004年10月	Analytical Sciences, Vol. 20	Seguchi, K., Tanaka, S. and Kobayashi, A. ウラゾールのエタノール光付加体をエタノールアルカリで処理したところ、標題の3環性ヒドロキシルアミンを与えた。その立体構造をX線構造解析により決定した。
13. Fading of azo dyes with sodium sulphite	共	2000年01月	J. Soc. Dyers & Colourists Vol. 116	K. Seguchi, M. Iwata, T. Machida, S. Tanaka 多くのアゾ染料の亜硫酸ナトリウムによる退色を30℃、pH 3-10で速度的に検討した。退色機構が染料の構造によって3種(A-type-付加、R-type-還元、N-type-不活性)に分類されることがわかった。A-type、R-typeは亜硫酸イオンが、染料のヒドラゾン互変異性体中の、それぞれ共役エノン及び共役イミノン部への付加から退色が始まること、しかし上記の共役系ないとN-typeとなることを明らかにした。さらにNMRから退色物の構造を決定した。
14. Crystal Structure of 5-(Dibenzylamino)8-methoxy-4a[1-(methoxymino)ethyl]2-phenyl-4a, 5-dihydro[1, 3, 5]triazino[1, 2-a]indole-1, 3(2H, 4H)-dione	共	1999年3月	Analytical Sciences, Vol. 15	S. Tanaka, K. Kato, H. Kimoto, K. Seguchi ウラゾールとジベンジルアミンとの光反応によって得られたヘテロキナン誘導体(標題の化合物)をX線構造解析を行い、化合物の立体化学を決定した。
15. Effects of Cyclodextrins on Fading of Azo Dyes with Sodium Sulphite	共	1999年05月	J. Jpn. Oil Chem. Soc. Vol. 48	C. Katsumata, K. Seguchi 亜硫酸ナトリウムによるアゾ染料(1-アリルアゾ-2-ナフトール)の退色に及ぼすシクロデキストリン(CyD)の効果を30℃で検討した。染料の退色機構は染料のヒドラゾン互変異性体の共役エノンに対する亜硫酸の付加(C-付加)、及び共役イミノンに対する亜硫酸の付加(N-付加)といった染料の反応部位に応じて2種に大別できた。CyDによる退色の抑制効果について、置換基効果、CyD空洞への染料取り込みの深淺、染料の反応部位、結合定数(Ka)から考察した。
16. Synthesis of Heterodiquinanes by Photoreaction of $\beta$ -Keto Esters with Oxime Methyl Ethers Derived from 3-Acyl-1, 2-dihydrocinnoline-1, 2-dicarboximides	共	1998年10月	Chemistry Letters (1998)	S. Tanaka, K. Seguchi アセトニトリル中ヒドラゾジカルボキシイミドと $\beta$ -ケトエステルとの光反応をトリエチルアミン存在下及び無添加で検討したところ、三環性ヘテロキナン誘導体を比較的良好な収率で得た。その構造はX線結晶解析から確認した。
17. Active Urazols: Useful starting materials for the synthesis of novel heterocycles	共	1997年1月	Recent Res. Devel. Org. & Biorg. Chem	K. Seguchi, S. Tanaka
18. One-pot Synthesis of 1, 10-Dihydro-2H-imidazo[3, 4-a]quinazolin-1-ones from 3-Acyl-1, 2-Dihydrocinnoline-1, 2-dicarboximides	共	1997年04月	Heterocycles Vol. 45, No. 4	K. Seguchi · S. Tanaka 標題のジカルボキシイミドをジメチルスルホキシド中ピペリジンと反応させるとピペリジンのマイケル付加後、骨格の転移、脱炭酸が起き、キナゾリノン誘導体を比較的良好な収率で与えた。
19. カチオン界面活性剤存在下でのニトロフェノール類の酸性度に及ぼすシクロデキストリンの効果	共	1997年03月	桜井女子短大紀要 18巻	勝又・瀬口 標題の化合物の酸性度(pKa)を $\alpha$ -及び $\beta$ -シクロデキストリン(CD)とCTAB存在下で測定したところpKaはCTABの増加とともに複雑な変化を示した。この原因はゲストのCTABミセルへの取り込み、およびCDとの包接との競争が起きるためと考えた。さらにCTAB-CD包接体の構造を13C-NMR測定から検討した。
20. Photo-induced Reactions of Oxime O-Ethers Derived from 3-Acyl-1, 2-dihydrocinnoline-1, 2-dicarboximides	共	1996年12月	Bull. Chem. Soc. Japan Vol. 69, No. 12	S. Tanaka · K. Seguchi · K. Itoh · A. Sera 標題の化合物をベンゼン中で光照射すると[1, 3, 5]トリアジノ[1, 2-a]インドール環を有する転位化合物を与えた。求核剤存在下での光照射では、二量体と求核剤が付加した転位生成物を与えた。これらの結果、及びUVと蛍光スペクトルの溶媒依存性から、これらの光反応は極性な励起状態からの窒素窒素結合の開裂から起きることが示唆された。
21. 水溶液中の置換ニトロフェノール類の酸性度に及ぼすシクロデキストリンの効果	共	1996年09月	日本油化学会誌 45巻 9号	勝又・瀬口 標題の化合物の酸性度(pKa)を $\alpha$ -及び $\beta$ -シクロデキストリン(CD)存在下で測定したところ、水中とCD存在下での酸性度の差 $\delta$ pKaは、置換基の位置、大きさ、電子的性質、疎水性により異なることがわかった。その差は標題の化合物とCDとの包接体の安定性に起因するとした。包接体の構造については1H-NMRの化学シフトから検討した結果、p-ニトロ体ではニトロ基を先頭に、o-ニトロ体では置換基を先頭にCD空洞内に侵入することがわかった。
22. 亜硫酸ナトリウムによるアゾ染料の退色生成物の検討	共	1996年06月	繊維学会誌 52巻 6号	瀬口・岩田・田中 亜硫酸ナトリウムによるアゾ染料の退色を30℃で分光光度計により確認した。退色生成物は、いずれも

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
23. 高活性ウラゾールを活用した新規ヘテロ環化合物の合成	共	1996年03月	有機合成化学協会誌	テトラブチルアンモニウムイオンとの複合体として有機溶媒抽出し、NMR及び2D COSY測定を行った。その結果、アゾ染料の亜硫酸ナトリウムによる褪色生成物はこれまで推定されてきたヒドラゾ化合物ではなく、亜硫酸ナトリウムのマイケル付加体であることが判明した。 田中・瀬口 ベンジリデンケトン類とPTADとの付加脱離反応により得られた高活性ウラゾールから新規ヘテロ環化合物の合成法について述べた。ウラゾールの加アルコール分解や加アミノ分解からは、特異的な骨格をもつオキサゾリジノンやプロペランのヘテロ類縁体が高収率で得られる。またウラゾールの光反応からは、インドール骨格とトリアジン骨格を合わせもつ新規なヘテロ環化合物が生成する。
24. Crystal structure of N-phenyl-2,3-diaza-5-(E)-caarbomethoxymethylenetricyclo [4.3.0.0<sup>4,9</sup>] nonane-2,3-dicarboximide, C18H17N3O4	共	1995年07月	Zeitschrift fuer Kristallographie, Vol.210	K.Peters, E.M.Peters, H.G.von Schnering, W.Adam, K.Seguchi タイトルの化合物についてX線による結晶解析を行ない、その化学構造を確認した。
25. Crystal structure of N-phenyl-7,8-benzo-5-(E)-methylene-2,3-diazatri cyclo[4.4.0.0<sup>4,9</sup>]non-2-ene-dicarboximide, C21H17N3O2	共	1995年05月	Zeitschrift fuer Kristallographie Vol.210	K. Peters,E.-M. Peters, H. G. von Schnering, W. Adam, K. Seguchi タイトルの化合物についてX線による構造解析を行った。
26. One-pot Syntheses of 3-Cyanoindoles from 3-Acyl and 3-Ethoxy carbonyl-1,2-dihydrocinnoline-1,2-dicarboximides	共	1995年03月	J.Chem.Soc., Perkin 1, No.5	S.Tanaka, K.Seguchi, A.Sera 各種ウラゾールをDMF溶媒中、シアン化カリウムで処理を行うと、その反応溶液から2位にアシル基又はエトキシカルボニル基を持つ3-シアノインドールが得られた。反応メカニズムとして、シアノ基のマイケル付加の後、隣接基関与によって生成する中間体オキサゾリジノンを經由して、イソシアナートの脱離を伴いながらシアノインドールが生成するという機構を推定した。
27. One-pot Synthesis of Propellane Hetero Analogue from N-Phenyl-substituted 3-Acyl-1,2-dihydrocinnoline-1,2-dicarboximides under Phase-transfer-catalyzed Conditions	共	1994年12月	Heterocycles, Vol. 38, No. 12	S. Tanaka, K. Seguchi, A. Sera オルト位に水酸基を有するカルコンとPTADとの反応によるウラゾールから、二層系相間反応を利用してプロペランのヘテロ同族体を合成した。この反応は分子内マイケル付加反応を利用したものであり、またワンポットで容易に行えることから、合成上、有用なものとなっている。
28. Formation of Tetracyclic Oxazolidinones from Cycloadducts of Benzylidene Ketones with 4-Phenyl-4,5-dihydro-3H-1,2,4-triazole-3,5-dione (PTAD) by Base-promoted Backbone Participation Rearrangement	共	1994年11月	J.Chem.Soc., Perkin 1, No. 11	S. Tanaka, K. Seguchi, K. Itoh, A. Sera ベンジリデンケトン類とPTADとの付加脱離反応より合成したウラゾールの加アルコール分解と加アミノ分解から三環性化合物のオキサゾリジノンが得られた。この反応は、求核剤の付加、続くカルボニル基の隣接基関与によりウラゾール環が開環し、骨格の転位を伴って閉環するというメカニズムにより進行しているものと考えられる。
29. 染料の酸化分解に関する研究(第3報) 一次亜塩素酸ナトリウムによるナフトール染料の分解に及ぼす置換基の影響	共	1994年08月	繊維製品消費科学会誌, 35巻 8号	田中・瀬口 各種pHにおいて二層系酸化分解法により、7種のナフトール染料を次亜塩素酸ナトリウムを用いて酸化分解し、酸化分解の機構を生成物分析及び置換基効果から検討した。分解物の構造及び置換基定数と分解速度との関係から、分解は弱酸性下ではC12またはHOClによる主にベンゼン環又はナフタレン環への求電子的塩素化、ジアゾニウムイオンの脱離を伴った塩素化、及び二次的な酸化反応によると推定した。
30. 水溶性色素の次亜塩素酸ナトリウムによる酸化分解に及ぼす界面活性剤の効果	共	1994年07月	繊維学会誌50巻 7号	田中・瀬口 各種pHにおける次亜塩素酸ナトリウムによる水溶性色素の酸化分解を界面活性剤の効果を含めて検討した。界面活性剤添加の系では色素の分解の半減期から求めた見かけの速度とpHとの関係から、色素により2種の型に分類されることがわかった。また界面活性剤存在下で酸化分解を行うと、CTABはcmc以上の濃度で分解を著しく促進し、他の界面活性剤は分解に影響を与えないか、やや抑制する傾向を示した。
31. 染料の酸化分解に関する研究(第1報) 次亜塩素酸ナトリウムによるナフトール染料の分解物の同定と分解機構	共	1993年01月	繊維製品消費科学会誌, 34巻、1号	瀬口、中納、田中 ナフトール染料のブリーチアウト加工の問題点に関連して、4種のナフトール染料を次亜塩素酸ナトリウムにより酸化分解を行い、分解物の構造をGC-MS、NMR、IRにより解析し、酸化分解の機構を推定した。
32. Synthesis and Fluorecent Properties of Oxime Ethers of 3-Acyl-1,2-dihydrocinnoline-N-phenyl-1,2-dicarboximide	共	1992年03月	Bull.Mukogawa Women's Univ. Nat.Sci. Vol.39	Tanaka・Seguchi スチリルケトンとPTADとの付加物(ケトウラゾール)から新規なオキシムエーテルを合成した。それらの蛍光特性に関して溶媒効果から検討した結果、励起状態はかなり極性であることがわかった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
33. Studies on Bleaching Mechanism of Dyes. Part II: Identification of Decomposition Product of Hydroxyazobenzenes by Sodium Hypochlorite and Bleaching Mechanism	共	1992年03月	Bull. Mukogawa Women's Univ. Nat. Sci. Vol. 39	Seguchi・Tanaka ナフトール染料のブリーチアウト加工の問題点に関連して、ヒドロキシアゾベンゼン類を次亜塩素酸ナトリウムにより酸化分解を行い、分解物の構造をGC-MSにより解析し、酸化分解の機構を推定した。
34. Ready Alcoholysis of the Cycloadducts (Urazole) of 4-phenyl-1,2,4-triazole-3,5-dione by Solvent-assisted Backbone Participation	共	1991年11月	J. Chem. Soc., Perkin Trans. 1 No. 11	Seguchi・Tanaka PTADとスチリルケトンとの付加脱離反応で得られる付加体は求核剤のマイケル付加とともに、カルボニル基の関与によるオキサゾリノン体を与えた。
35. Base-Induced Addition-Elimination Reactions of Electron-Deficient Vinylarenes Containing a Carbonyl or Ester Group Utilizing 4-Phenyl-3H-1,2,4-triazole-3,5 (4H) -dione (PTAD)	共	1991年10月	Bull. Chem. Soc., Japan Vol. 64, No. 10	Seguchi・Tanaka 電子吸引性を有するビニルアレンとPTADとの反応により、PTADが付加脱離反応を起こした物質が得られることがわかった。
36. Cycloaddition of 4-Phenyl-4H-1,2,4-triazole-3,5-dione (PTAD) with Benzalketones and Cinnamates	共	1991年03月	武庫川女子大学紀要自然科学編38集	Seguchi・Tanaka 置換ベンザルケトンまたは桂皮酸エステルとPTADとの反応でDiels-Alder体及びDiels-Alder-ene体とが生成した。Diels-Alder-ene体は不安定でPTAD・H <sub>2</sub> が脱離することがわかった。
37. Novel Base-promoted Addition-Elimination Reaction of Electron-deficient Benzylidene Derivatives with N-phenyl-1,2,4-triazole-3,5-dione (PTAD)	共	1991年02月	J. Chem. Soc., Chem. Commun. No. 2	Seguchi・Tanaka ベンジリデンケトン類とPTADとの反応によって得られる1:2付加体から、塩基処理によりPTADが1分子脱離した黄色物質を与えることを見いだした。
38. Micellar effects on photostabilization of 4,4'-diaminostilbene 2,2'-disulfonates derivatives	共	1991年01月	Trends in Org. Chem. No. 1	Seguchi・Tanaka・Ebara・Yoshida・Hashimoto 各種界面活性剤存在下でのスチルベン系蛍光増白剤の光に対する蛍光挙動及び増白剤の光安定性について検討した。
39. 中性のアルコール水溶液中でのインジゴ染色	共	1990年09月	日本家政学会誌, 41巻, 9号	牛田・松尾・瀬口 インジゴ染色にインジゴホワイトのエタノール水溶液を用いれば、繊維にとって好ましい中性の条件で十分な濃色に染色できることがわかった。
40. パーマ液による染色布の変退色に関する研究	共	1990年03月	武庫川女子大学紀要自然科学編37集	瀬口・森瀬・壺坂 クリーニングのクリームの一つである衿ぐりの一部が変退色を起こす原因は、誤って付着したパーマ液であることを染料液、市販の衣服を用いて明らかにした。
41. Novel Photo-oxidation of Aromatic Hydrocarbons Having Active Methylene Group in the Presence of Ferric Ion	共	1990年03月	武庫川女子大学紀要自然科学編37集	Seguchi・Hirota アセトニトリル中Fe(III)の存在下で活性メチレン基をもつ芳香族炭化水素は光酸化を受け、アルコール、ケトン、アミドを生成することを明らかにした。
42. Drastic Photo-stabilization of 4,4'-Diaminostilbene 2,2'-Disulfonates in Micellar Solutions	共	1990年03月	武庫川女子大学紀要自然科学編37巻	Seguchi・Tanaka・Ebara・Yoshida ジアミノスチルベン系の蛍光増白剤の光退色がセシルピリジニウム塩を添加すると著しく抑制されることわかった。
43. Studies on Bleaching Behavior of Sodium Hypochlorite by Permeation Method into Films	共	1989年03月	武庫川女子大学紀要被服篇36集	Seguchi・Sugimoto・Hirota セロハン、ナイロン、ポリエステルフィルム上のモデル汚れ(染料)の次亜塩素酸ソーダによる漂白はフィルムへの漂白剤の浸透が律速になっていること、またpHによって浸透の化学種が異なることを見出した。
44. Micellar Effect on Fluorescence of Fluorescent Whitening Agent	共	1989年03月	武庫川女子大学紀要被服篇36集	Seguchi・Yoshida・Tanaka 三種のクマリン系蛍光剤の蛍光挙動について、カチオン界面活性剤(CTAB、CPC)存在下で検討した。CPは蛍光を消光、CTABは蛍光の増大を起こし、これまでの著者らの報告と類似した結果となった。その原因を蛍光剤のミセルへの溶解とエネルギー移動から考察した。
45. Cycloaddition of 4-Phenyl-4H-1,2,4-triazole-3,5-dione (PTAD) to 7-Alkylidene-2,3-benzonorborenones	共	1989年03月	Chem. Ber. Vol. 122, No. 3	Adam・Lucchini・Peters・Pasquato・Schnering・Seguchi・Walter・Will PTADと7-アルキリデンノルボルネンとの付加反応で、[2+2]、[4+2]、[ene]付加体を得られた。[4+2]付加体にはsyn/antiの異性体があり、NOE法、X線構造解析により構造を確認した。
46. Effect of Metal Ions on Photo-fading of Dye (II)	共	1989年03月	武庫川女子大学紀要被服篇36集	Seguchi・Yuasa 金属イオン存在下で酸性染料の光退色を溶液中で検討した。遷移金属イオンの光退色に対する作用は二分され、抑制作用、促進作用を示すことを見出した。その原因をキレート形成、光電子移動の観点から考察した。
47. 塩基性染料の光退色に及ぼすフタル酸部分の結合した修飾デキスト	共	1988年03月	武庫川女子大学紀要被服篇35集	牛田・石本・瀬口 メチレンブルー、クリスタルバイオレットの光退色

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
リンの効果				をフタル酸が結合したシクロデキストリンを添加して検討したところ、シクロデキストリンのみに比べ顕著に抑制効果がみられた。
48. Photo-fading of Crystal Violet in the Presence of Cyclodextrins	共	1987年03月	武庫川女子大学紀要被服篇34集	Ushida・Ishimoto・Seguchi クリスタルバイオレットの光退色の抑制にβ-シクロデキストリンが顕著な効果を示すことを見出した。これは、β-シクロデキストリンが染料と包接化合物を形成するためであることがわかった。
49. Fluorescent Behavior from Some Fluorescent Compounds in the Presence of Quaternary Ammonium Salts	共	1987年03月	武庫川女子大学紀要被服篇34集	Seguchi・Hirota 蛍光物質の蛍光挙動を第四級アンモニウム塩存在下で検討した。添加物としてピリジニウム塩骨格をもつものでは蛍光強度の低下がみられたが、蛍光物質としてアクリジンをういた場合、CTからの蛍光が観測された。
50. Effect of Metal Ions on Photo-fading of Azoic Dyes (I)	共	1987年03月	武庫川女子大学紀要被服篇34集	Seguchi・Imazu 金属イオン共存下での直接及び酸性染料の光退色について検討した。遷移金属は一般に退色を促進するが、銅イオンは染料によって異なり、促進、抑制の両作用を示すことがわかった。
51. Unusual Rearrangement Products in the Cycloaddition of 4-Phenyl-4H-1,2,4-Triazole-3,5-dione (PTAD) to Substituted 7-Methylenenorbornenes	共	1986年10月	Chem. Ber. Vol. 119, No.10 (1986)	Adam・Lucchini・Pasquato・Peters・Schnering・Seguchi PTADと置換7-メチレンノルボルネンとの付加反応で[2+2]付加物に加え、骨格の転位を伴ったウラゾールが得られた。1H-NMR (NOE) とX線構造解析により転位生成物の構造を決定した。
52. Thermal cis-trans Isomerization of Substituted Azobenzenes. Effects of Solvent and Catalyst	共	1986年03月	武庫川女子大学紀要被服篇33集	Seguchi・Hirota・Akashi 置換アゾベンゼンのシス→トランス異性化に及ぼす酸塩基触媒、溶媒効果を検討したところ、特に水酸基やアミノ基を有するアゾベンゼンで顕著な効果が観察された。これらのアゾベンゼンではヒドラゾ体を經由する異性化機構で進行することを結論した。
53. Adsorption of Metallic Ions on Wool	共	1985年03月	武庫川女子大学紀要被服篇32集	Hirota・Seguchi 酸性媒染染色をした羊毛、ナイロン-6を用いて、4種の重金属イオンの吸着性について検討した。重金属イオンの中で、Cu <sup>2+</sup> 、Cr <sup>3+</sup> の羊毛に対する吸着性が著しく高く、ナイロン-6では小さかった。吸着部位は高分子鎖のイオン部分を推定した。
54. Effects of Surfactants and Various Additives on the Fluorescence Behavior of Fluorescent Whitening Agents	共	1985年01月	Yukagaku Vol. 34, No. 1	Seguchi・Ebara・Hirota 蛍光増白剤の蛍光挙動に対する界面活性剤の影響について検討した。特にピリジニウム塩の骨格を有するカチオン系界面活性剤の添加により、蛍光の消光が見られ、一方、他の活性剤では蛍光強度の増大が起きた。この現象を界面活性剤ミセルと蛍光剤との相互作用の観点から考察した。
55. Solvent and Pressure Effects on the Aromatic Substitution Reaction. Chlorination of Anisole	共	1984年03月	武庫川女子大学紀要被服篇31集	Seguchi・Asano・Sera アニソールの塩素化を検討した。生成物の異性体比は、溶媒の誘電率に関係し、また、圧力効果も認められた。
56. アリールエーテル及びアリールスルフィドの1H NMRのスピン-格子緩和に関する研究	共	1984年03月	武庫川女子大学紀要被服篇31集	広田・瀬口 エーテルの光反応機構に関する知見を得るため、CDC13中でのプロトン緩和時間を測定し、スピン-格子緩和に対するエーテルの化学構造の影響について検討した。
57. α-置換ベンズインエーテルの光化学	共	1984年03月	武庫川女子大学紀要被服篇31集	瀬口・釘宮 α-置換アルキルベンズインエーテルは光照射により開裂を起こし、meso, dl-ピナコールエーテルを生成する。
58. Solvent Effect on the Aromatic Substitution Reaction. Chlorination of Toluene and t-Butylbenzene	共	1983年03月	武庫川女子大学紀要被服篇30集	Seguchi・Asano・Sera トルエン、t-ブチルベンゼンの塩素化に対する溶媒(プロトン性、非プロトン性、双極性非プロトン性)の3種)効果を異性体比から検討した。
59. カチオン界面活性剤のCMCに及ぼす対イオン効果	共	1983年03月	武庫川女子大学紀要被服篇30集	磯井・瀬口 対イオンの異なるアニオンを有するセシルピリジニウム塩を合成し、そのCMCを測定した。その結果、対イオンによってCMCが大きく影響を受けることが判明した。
60. Synthesis of Aromatic Ethers by Phase-Transfer Catalyzed Reaction	共	1982年09月	Yukagaku, Vol. 31, No. 9	K. Seguchi・A. Ozasa アルキルハライドと芳香族アルコールとのPTC反応による手軽な芳香族エーテルの合成を試みた。
61. Photo-oxidation of Aryl Ethers in the Presence of Ferric Chloride	共	1982年03月	Chemistry Letters 1982, No. 3	Seguchi・Hirota 鉄(III)イオン存在下での芳香族エーテルの光反応を検討した結果、両者間での光-電子移動を伴う酸化分解が起った。
62. 各種界面活性剤によるベンゼン中への解離型染料の溶解に関する研究	共	1982年03月	武庫川女子大学紀要被服篇29集	瀬口・磯井 解離型染料の30℃でのベンゼンへの溶解度に及ぼす

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
究				各種界面活性剤と水の添加効果、染料と界面活性剤の荷電の効果について検討した。
63. 含水アセトニトリル中での芳香族アルコールの光酸化反応	共	1982年03月	武庫川女子大学紀要被服篇29集	瀬口・広田 含水アセトニトリル溶媒で芳香族アルコールに金属イオン、色素、配位子を加え照射し、その反応性を検討した。
64. 濃硫酸中での芳香族カルボニル化合物の光化学反応	共	1982年03月	武庫川女子大学紀要被服篇29集	池山・稲田・瀬口 濃硫酸中でのアントラキノン (AQ) 誘導体の光反応は、含酸素置換基を除いては、光水酸化が効率よく起き、特に $\alpha$ -ハロゲンAQでは好収率で反応した。この反応について置換基効果、反応速度、硫酸濃度変化等から詳細に検討し、反応機構を推察した。
65. 蛍光染料の蛍光強度に及ぼす各種界面活性剤の効果	共	1982年03月	武庫川女子大学紀要被服篇30集	広田・瀬口 ジアミノスチルベン系、クマリン系蛍光増白剤と各種界面活性剤との相互作用を蛍光強度、蛍光スペクトル、吸収スペクトルの変化から検討した。
66. Carbon-13 Chemical Shifts of Polychlorobicyclo [2.2.1] heptene Derivatives	共	1981年04月	Bull. Chem. Soc., Japan, Vol. 54, No.4 (1981)	Sera・Takagi・Nakamura・Seguchi Diels-Alder反応の研究の一環とし、5-置換ポリクロロビシクロ [2.2.1] ヘプテン-2の <sup>13</sup> Cケミカルシフトの解釈を行った。
67. Photo-nucleophilic Substitution Reaction of Halogeno-anthraquinone	共	1980年10月	Chemistry Letters 1980, No.10	Seguchi・Ikeyama アントラキノン誘導体に硫酸中で照射を行なうと、ヒドロキシアントラキノン誘導体を得られた。
68. 樹脂加工布からホルムアルデヒド量に及ぼす環境因子の検討 (第3報)	共	1980年07月	繊維製品消費科学21巻、7号	瀬口・山口 第1、2報に続き、環境因子として温度、湿度を取り上げ検討した。
69. 高速液体クロマトグラフィーによる含水メタノール中における疎水結合の評価	共	1980年03月	武庫川女子大学紀要被服篇28集	池山・瀬口 直鎖アルキルベンゼン類、縮合環化合物について保持容量に対する移動相の効果、及び温度効果を求め、含水アルコール中における疎水性相互作用を検討した。
70. 解離型染料を用いた非水染色の研究新しい助剤ークラウンエーテル	共	1980年03月	武庫川女子大学紀要被服篇28集	瀬口・井村 解離型染料の有機溶媒への溶解助剤としてのクラウンエーテルの可能性について検討した。アルコール中、染色促進剤としての効果はないが、染料の溶解度を増大させる効果が認められた。
71. 繊維製品への防虫剤の吸収	共	1979年11月	繊維製品消費科学20巻、11号	瀬口・安藤 防虫剤としてp-ジクロロベンゼン (1)、ナフタレン (2)、樟脳 (3) を使い、それらの繊維への吸収量を比較した結果、(1)、(2) では合成繊維に対し、(3) では動物繊維に対し、大きな吸収性を示した。
72. 酸性染料のナイロン-6 繊維への染着挙動に及ぼす溶媒効果	共	1979年10月	繊維学会誌35巻、10号	瀬口・伊藤・樫野 ナイロン-6 繊維を酸性染料で有機溶剤中で染色した。染着量に対する助剤の効果、極性の効果について検討し、溶剤染色の機構を提案した。
73. 置換アントラキノンのIR及びUVスペクトルによる構造解析	共	1979年03月	武庫川女子大学紀要被服篇27集	瀬口・池山 アントラキノン誘導体のIR及びUVスペクトルを検討した結果、置換基の種類、位置により、一定の法則性をもっていることを見出した。これらの情報からアントラキノン誘導体の化学構造をある程度推定することが可能であることがわかった。
74. 脱着法による繊維と溶剤との相互作用	共	1979年03月	武庫川女子大学紀要被服篇27集	瀬口・加藤 各種繊維をアルコール及び水に50℃で平衡膨潤させた後の繊維から溶媒の脱着過程を検討した。その結果、溶媒の脱着速度は、溶媒だけでなく、繊維によって著しく変化することが判明した。
75. 置換ニトロフェノール類の可視スペクトル及び酸性度に及ぼす界面活性剤の効果	単	1979年01月	油化学28巻、1号	置換ニトロフェノールは界面活性剤の添加により吸収スペクトルの長波長シフトを起こすことを見出し、その原因について、ミセル中での基質の酸性度の変化、極性の効果、疎水性相互作用の観点から明らかにした。特にカチオン系界面活性剤では、そのcmcの測定にも応用できる。
76. 樹脂加工布からのホルムアルデヒド量に及ぼす環境因子の検討 (第2報) -光の影響-	共	1978年07月	繊維製品消費科学会誌19巻、7号	瀬口・荻野・樫野 尿素系及びメラミン系樹脂加工布から遊離するホルムアルデヒド量に及ぼす環境の効果 (光の影響、汗と光との複合効果) を検討した。
77. 直接染料のセルロースへの染着に及ぼす非プロトン溶媒の効果	共	1978年03月	武庫川女子大学紀要被服篇26集	瀬口・寺本 直接染料による木綿の染色を水~非プロトン溶媒混合系で行い、染着量に及ぼす溶媒効果を検討した。
78. 硫酸中での置換9、10-アントラキノンの光反応 (第1報)	共	1978年03月	武庫川女子大学紀要被服篇26集	瀬口・池山 硫酸中で置換アントラキノンに高圧水銀燈で照射を行うと、水酸基を有する生成物を得られた。この反応機構を解明するため、溶媒の酸度関数を変化させ、その影響をみた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
79. 樹脂加工布からのホルムアルデヒド量に及ぼす環境因子の検討 (第1報) -汗の影響-	共	1978年01月	繊維製品消費科学会誌 19巻、1号	瀬口・荻野 尿素系及びメラミン系樹脂加工布から遊離するホルムアルデヒド量に及ぼす環境の効果(汗)を検討した。
80. 解離型染料を用いた溶剤染色の研究、酸性染料-ポリアミド	共	1977年07月	繊維学会誌33巻、7号	瀬口・樫野 塩素化炭化水素~アルコール溶媒系でのナイロンに対する酸性染料の染着性に及ぼす溶媒効果について検討した結果、染着性が溶媒組成(極性)に影響されることがわかった。
81. 置換ニトロフェノールの紫外可視吸収スペクトルに及ぼす界面活性剤の効果	単	1977年03月	武庫川女子大学紀要被服篇25集	界面活性剤効果は、特にo-ニトロフェノール体へのカチオン界面活性剤添加で顕著に現われた。これをフェノレートイオンとカチオンミセルとの静電的相互作用から説明した。
82. 解離型染料を用いた溶剤染色の研究(Ⅲ)水~有機溶媒混合系でのナイロン-6の染色について	共	1977年03月	武庫川女子大学紀要被服篇25集	瀬口・樫野 ナイロン-6繊維を水~有機溶媒混合系でOrange IIを用い染色した。一般に含水量の高い程染着率は高いが、有機溶媒含量が20~40%に染着率の極小値がある。
83. Steric Control in the Diels-Alder Reaction	共	1976年12月	Bull. Chem. Soc., Japan, Vol. 49, No.12	Seguchi・Sera・Maruyama クロシクロペンタジエンと置換エチレンとのDiels-Alder反応を検討し、生成物のexo:endo比を求めた。ジエンのC-5の位置を塩素置換すると、反応性の低下とともにendo%が増大することがわかった。これは、選択性と反応性の関係から予想されるものとは逆であり、C-5の塩素による立体効果の重要性を示唆するものと解釈した。
84. デイルドリン代替防虫加工剤の合成(第1報)	単	1976年03月	武庫川女子大学紀要被服篇24集	毒性の高いデイルドリンの代替防虫加工剤の開発を目的とし、デイルドリン類似の含塩素系防虫加工剤の合成を試みた。
85. An Investigation of the endo-Product Selectivity in the Diels-Alder Reaction	共	1975年12月	Bull. Chem. Soc., Japan, Vol. 48, No.12	Seguchi・Sera・Otsuki・Maruyama シクロペンタジエンと種々の置換エチレンのDiels-Alder反応を行い、反応速度とendo%を求めた。その結果、反応性の高いもの程endo選択性が高いことがわかった。この結果は、遷移状態での軌道の二次的な相互作用に起因するものと考えた。
86. The Effect of Pressure on the Diels-Alder Reaction	共	1974年09月	Bull. Chem. Soc., Japan, Vol. 47, No.9	Seguchi・Sera・Maruyama Diels-Alder反応に対する圧力効果を検討し、得られた活性化体積が反応の自由エネルギーと良い相関があることがわかった。この結果から、活性化体積を求めることにより反応経路における遷移状態の位置を予想できることがわかった。
87. Evidence of Volume Contraction in the Transition State of the Diels-Alder Reaction	共	1973年07月	Tetrahedron Lett. 1973, No.17	Seguchi・Sera・Maruyama シクロペンタジエンと置換エチレンとのDiels-Alder反応を行い、生成物のexo, endoの活性化体積を求めた。その結果、endoの活性化体積がより小さいことがわかった。この原因としてendo遷移状態における軌道の二次的な相互作用の重要性を指摘した。
88. 有機化学反応機構-圧力効果の有用性	共	1971年05月	化学 26巻、5号	世良・瀬口 圧力効果が有機化学において、反応機構を研究していく上で有用な手段であることを述べた。
89. Unusual Solvent Effects on the ortho: para Ratio in the Chlorination of Anisole	共	1970年10月	Bull. Chem. Soc., Japan, Vol. 43, No.10	Seguchi・Asano・Sera・Goto アニソールの塩素化(芳香族親電子置換反応)に対する溶媒効果を異性体比から検討した。
90. チオモルホリノアゾベンゼン類の合成	共	1970年05月	日本化学雑誌 91巻、5号	世良・竹村・井上・真柄・瀬口・後藤 同一分子内にチオモルホリン環とアゾ基を有する化合物をアゾカップリング反応により合成した。

その他

1. 学会ゲストスピーカー

1. 武庫川女子大学女性研究者支援センター 第4回意識啓発セミナー	共	2014年8月2日	座談会講師	世界を舞台に活躍する女性研究者の育成・支援、何が必要?なぜ必要?
2. 第1回武庫川女子大学栄養科学研究所公開シンポジウム	単	2013年2月9日		武庫川女子大学栄養科学研究所立ち上げ挨拶
3. 第2回女性研究者支援センターシンポジウム	単	2013年11月2日		「社会で活躍する女性の育成に向けて」挨拶
4. 戦略的学連携とコンソーシアムによる地域人材育成	単	2008年11月		臨床医工学・情報学領域関西5大学連携事業の概要について講演した。
5. 聞き水にチャレンジャーおいしい水を探して-	単	2006年6月	国際ロータリー(兵庫)による環境教育フォーラム2006 IN 尼崎	環境教育フォーラムでタイトルに関して講演した。
6. 染料の安全性その分析法	単	1990年1月	日本繊維製品消費科学会	実用性能評価に関するセミナー(衣服の安全性)において「染料の安全性とその分析法」のタイトルで講演した。

2. 学会発表

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
1. キノンイミン型色素とチオグリコール酸誘導体との新規な反応	共	2016年3月26日	日本化学会第96春季年会 同志社大学(新田辺)、3F7-02	日置理恵、小林礼佳、瀬口和義 安定キノニンイミン骨格を有するフェニルアゾアプトルアミンに対するチオグリコール酸誘導体との反応を検討したところ、チオグリコール酸が1分子または2分子付加環化したナフトチアジン誘導体を得た。
2. 染毛用酸化染料系の空気酸化に関する検討	共	2015年10月25日	日本家政学会関西支部第37回研究発表会	小林礼佳・日置理恵・瀬口和義 酸化染毛剤の発色生成物について、プリカーサーとしてp-アミノフェノール、カップラーとして1-ナフトールとの混合物を用いて、空気酸化によりカップリングを行った結果、3種の化合物を得ることができた。
3. 光触媒による置換アゾベンゼンのアルコール中での退色	共	2015年10月25日	日本家政学会関西支部第37回研究発表会	川上華佳・矢吹秀子・瀬口和義 置換アゾベンゼンをメタノール溶媒中、酸化チタンによる光反応を行った結果、6員環テトラアザ化合物を得ることができた。またその反応のメカニズムを提案した。
4. キノイミン型染料のイオウ化合物による還元	共	2014年3月28日	日本化学会第94春季年会(名古屋) 2PA-138	日置理恵・段林恵美・瀬口和義 キノイミン化合物の反応性について比較的安定なアゾ染料、酸化染料を利用してイオウ化合物(チオグリコール酸および亜硫酸ナトリウム)による還元特性を検討した。
5. アミノアゾ染料のパーマ液による退色に関する研究	共	2014年10月25日	日本家政学会関西支部第36回研究発表会	日置理恵・瀬口和義 表題の染料に対するパーマ液の反応について、退色生成物の単離およびその構造を明らかにした。生成物は1または2分子のチオールが染料に付加環化したものであった。
6. 酸化染毛剤の発色過程の研究	共	2013年10月12日	日本家政学会関西支部第35回研究発表会	日置理恵・瀬口和義 酸化染毛剤の空気酸化での発色の可能性を検討したところ、前駆体やカップラーにより反応速度や生成物の安定性が異なることが分かった。
7. 茶殻の金属処理によるアンモニアの消臭効果	共	2013年10月12日	日本家政学会関西支部第35回研究発表会	宮本佳澄美・瀬口和義 茶殻を金属処理することにより悪臭物質の一つであるアンモニアを効率的に吸着することを見出した。金属として鉄イオンが最も有効であった。
8. 蛍光剤の蛍光挙動及び光退色に及ぼす界面活性剤の効果	共	2009年05月	日本家政学会第61大会	濱谷志保、瀬口和義 蛍光増白剤を用いて、蛍光強度及び光退色(光異性化)に及ぼす界面活性剤の添加効果について検討した。界面活性剤のイオン性が、大きな影響を持つことがわかった。
9. 蛍光剤からの蛍光特性に及ぼす界面活性剤の効果	共	2008年08月	第17回繊維連合研究発表会	濱谷志保、瀬口和義 各種蛍光剤に対して、アニオン、カチオン、ノニオン界面活性剤を添加し、蛍光及び吸収スペクトルを測定した。その結果、蛍光剤のイオン性によって蛍光の変化が著しいことが分かった。これをミセル効果から考察した。
10. 無臭ビスアゾナフトール-メルカプト酢酸マイケル付加体の合成とキノン類との反応	共	2007年11月	第38回中部化学関係学協会支部連合秋季大会	瀬口和義、阿部さつき メルカプト酢酸とアゾ色素との反応で、無臭、橙色のマイケル付加体を得た。この付加体を用いてキノン類との反応について検討したところ、キノンとメルカプト酢酸との付加物が得られた。
11. 修飾クルクミンの光化学反応	共	2007年11月	第38回中部化学関係学協会支部連合秋季大会	岡田彩、松本慶子、瀬口和義 アルキルまたはアセチルクルクミンを合成し、アセトニトリル溶媒中、酸素及び窒素雰囲気下で光反応させたところ、酸素雰囲気下では環状過酸化化合物、窒素雰囲気下では、シクロブタン誘導体が生成することを見出した。
12. 酸化チタンによるアゾ色素の光分解とそのメカニズム	共	2006年09月	第46回染色化学討論会	松山ときわ、田中沙和子、瀬口和義 アルコール中でアゾベンゼン類を酸化チタン存在下で光分解したところ、メタノール中では1,2,4,5-テトラアザシクロヘキサン誘導体が生成した。窒素気流中ではジヒドラジニルメタン誘導体が生成した。アゾ色素からこれらの生成物の生成メカニズムを検討した。
13. ウラゾールの光反応に及ぼすTiO2の効果	共	2001年03月	日本化学会第79春季年会	田中總子・加藤且也・ゴンウエファ・瀬口和義 シアノアルカン中で、ウラゾールのオキシムエーテルの光反応を検討したところ、酸化チタン存在下で、シアノアルカンが付加した転位生成物を与えた。
14. 4-アリアルアゾ-1-ナフトールとメルカプトカルボン酸による1,4-ナフトチアジン類の合成	共	1998年03月	日本化学会第74春季年会	瀬口和義・伊藤法子・田中總子 標題のアゾ染料から一段階で、含硫黄ヘテロ環化合物のナフトチアジン誘導体を合成することに成功した。
15. ウラゾールとβ-ジケトン及びβ-ケトエステル類との連続的付加環化によるヘテロポリキサン類の合成	共	1997年10月	第28回複素環化学討論会	田中總子・瀬口和義 ウラゾールとβ-ジケトン(β-ケトエステル)との光反応を行ったところ、オキサゾリジン骨格を有する四環性キサン類のヘテロ類縁体を容易に与えること

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
16. 亜硝酸と光との複合作用によるアミノアントラキノン系染料の変化	共	1996年11月	第14回繊維連合研究発表会	がわかった。この光反応機構についても考察した。 園山紀子・中山直美・田中總子・瀬口和義 1-置換および1,4-ジ置換アミノアントラキノンに亜硝酸ナトリウムで処理した後、光照射すると脱ニトロ化、脱アミノ化とともに溶媒が絡んだ生成物を与えることがわかった。
17. 亜硫酸ナトリウムによるアゾ染料の退色に及ぼすシクロデキストリンの効果	共	1996年11月	第14回繊維連合研究発表会	勝又千寿代、瀬口和義 アゾ染料に対する亜硫酸ナトリウムによる還元漂白はマイケル付加であるが、この漂白過程に対してシクロデキストリンを添加した効果について、漂白速度から検討したところ、包接しやすい染料については顕著な漂白抑制効果が見られた。
18. ウラゾールとβ-ジケトンとの光反応による新規なヘテロ環化合物の合成	共	1996年10月	光化学討論会	田中總子・山縣祐子・瀬口和義 ウラゾールのオキシムエーテルとβ-ジケトンとの光反応によりインドリン骨格を有する三環性ヘテロトリキナン誘導体が容易に生成することを見出した。
19. 亜硫酸ナトリウムによるアゾ染料の退色機構	共	1996年07月	第37回染色化学討論会	瀬口和義・岩田理・田中總子・待田多美 亜硫酸ナトリウムによる14種のアゾ染料の退色を検討した。吸収スペクトル変化から、退色性は付加タイプ、還元タイプの2種に分類されることがわかった。
20. NOxによるアゾ染料の退色機構	共	1996年07月	第37回染色化学討論会	中山直美・瀬口和義 アゾ染料を希硝酸による退色を検討したところ、一部の染料に退色までに長い誘導期間があるといった異常退色現象が見られた。その機構は、窒素酸化物による自触媒反応であることがわかった。
21. 隣接にオキシムエーテル基を有するウラゾールの光反応	共	1995年10月	日本化学会中国・四国・九州支部合同大会	田中總子・瀬口和義 ベリジリデンケトン類とPTADとの付加脱離反応により得られたウラゾールのオキシム誘導体の光反応について、各種増感剤を添加して検討を行った。ウラゾールの直接照射ではトリアジン骨格とインドール骨格をもつ生成物や溶媒が関与した生成物が得られたが、増感剤を添加した系ではウラゾールの〔2+2〕付加環化反応によるシクロブタン環をもつ二量体を得られた。
22. 窒素酸化物による染料の異常変退色に関する研究	共	1995年06月	日本繊維製品消費科学年次大会	瀬口和義・中山直美・木戸紀子 NOxによるアゾ染料の退色機構について検討を行ったところ、一部の染料では誘導期間をもった退色挙動を示した。これは反応系内で副生したNOxが関与しているものと思われる。また、退色生成物としてアゾ基が切断したナフトール類やジアゾニウム塩が生成することがわかった。
23. カルボニル基を隣接基とするウラゾールの光転位反応	共	1994年04月	日本化学会第67春季年会	田中總子・瀬口和義・伊藤邦明・世良明 PTADとベンジリデンケトン類との反応から得られるウラゾール体に光照射を行うと、ウラゾール環の開環、骨格の転位を伴った新規な化合物が得られた。
24. ウラゾールを活用した多環性ヘテロ化合物の合成	共	1994年04月	日本化学会第67春季年会	田中總子・瀬口和義・伊藤邦明・世良明 PTADとベンジリデンケトン類との付加脱離反応から得られるウラゾール体をアルコール溶媒中アルカリ処理すると、アルコールの付加と共に、骨格の転位を起こし、ヘテロトリキナンが得られた。
25. オキシムエーテルの異常光転位反応 (3)	共	1993年09月	日本化学会第66秋季年会	田中總子・瀬口和義・世良明 スチリルケトン類とPTADとの付加脱離反応により得られたウラゾール体のカルボニル基をオキシムエーテル基に変換したウラゾール体は、光照射によりアルコキシ基が容易に異常転位することを見出した。
26. オキシムエーテルの異常光転位反応 (2)	共	1993年03月	日本化学会第65春季年会	田中總子・瀬口和義・世良明 オキシムエーテルを含むウラゾールはアルコール溶媒中の光照射によりアルコールがマイケル付加した新規な生成物を与えることを見出した。
27. PTAD付加体からのBackbone Participationによるオキサゾリジノンの合成	共	1992年3月	日本化学会第63春季年会	瀬口和義、田中總子 PTADとスチリルケトン類との付加脱離により得られる黄色の付加体(ウラゾール体)を水添した後、アルカリで処理するとウラゾール部に対し、β位のカルボニル基のBackbone Participationによりウラゾール環が分解し、オキサゾリジノンを与えることを見出した。
28. オキシムエーテルの異常光転位反応	共	1992年10月	日本化学会第64秋季年会	田中總子、瀬口和義 オキシムエーテル基を有するウラゾールに光照射を行うと、オキシムエーテル基が転位した新規な生成物を得られた。
29. プロテアーゼ用人工汚染布の作製と最適化		1991年6月	日本繊維製品消費科学1991年次大会	横山早美、川島憲治、瀬口和義 プロテアーゼ含有酵素洗剤用の人工汚染布(アルブミン+墨汁)を各種条件下で作製した。その結果、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
30. 次亜塩素酸塩によるアゾ色素の漂白過程の研究（第3報）	共	1991年11月	第23回洗浄に関するシンポジウム	布を浸染後、乾燥器で80℃、30分固着させるのが最も良いことがわかった。 瀬口和義、田中總子 アゾ色素の漂白剤（塩素系）による分解について、分解に対するpH効果、分解物の追跡から漂白機構を推定した。
31. ベンジリデンケトン類とPTADとの付加脱離反応	共	1991年10月	第22回中部化学関係学協会支部連合秋季大会	瀬口和義、田中總子 ベンジリデンケトンに対しPTADを作用させると、付加脱離が起き、新規な化合物が得られた。
32. 活性アジドを用いた光発色染法の試み	共	1990年7月	第32回染色化学討論会	瀬口和義、山本恵子 芳香族アジドを用いて、レーザー光または水銀灯から照射するとアゾ化合物の生成により着色した。これを新規な光発色染法として提案した。
33. 酵素洗剤の評価—人工汚染布の作製と評価法	共	1990年6月	日本繊維製品消費科学1990年年次大会	横山早美、瀬口和義 タンパク質分解酵素を有する洗剤の評価を行うため、アルブミンと墨汁とで人工汚染布を作製した。これを用いて酵素含有洗剤で洗浄すると洗浄時間と共に洗浄効率は増大したことから、汚染布として有用であることがわかった。
34. 活性アジドを用いた光発色染法（第2報）—生成物分析—	共	1990年11月	日本家政学会関西支部第12回研究発表会	田中總子、瀬口和義 光を利用した発色染法の基質として芳香族アジドを用いて、光反応させ、生成物をGC-MSで分析した。生成物としてアゾ化合物を確認した。
35. パーマ液による染色物の変退色の研究	単	1990年11月	日本家政学会関西支部第12回研究発表会	瀬口和義 クリーニングトラブルの中にパーマ液が原因とみられる変色の事例がある。この原因を探るため、市販布240枚に対してパーマ液1液、2液滴下し、変色を検討した。更にこのサンプルをクリーニング工程に入れ、変色を観察したところ、プレス工程で変色割合が高くなることを見出した。
36. プロテアーゼ用人工汚染布の作製と洗浄 繊維中の残留蛋白質の定量	共	1990年11月	日本家政学会関西支部第12回研究発表会	横山早美、川島憲治、瀬口和義 酵素洗浄による洗浄評価のため、著者が提案したプロテアーゼ用人工汚染布を用いて、酵素洗浄による布上の残存蛋白質量を測定した。界面活性剤共存下での洗浄が有効であることを確認した。
37. 隣接基関与によるウラゾールの新規な加水分解	共	1990年10月	第21回中部化学関係学協会支部連合秋季大会	瀬口和義、田中總子 ベンザルアセトンとPTADとの反応で得られるウラゾールを塩基下で分解すると、隣接のカルボニル基が絡んだ物質を容易に与えることがわかった。
38. クロム（Ⅲ）によるエタノール中での媒染染色	共	1990年10月	第12回繊維連合研究発表会	瀬口和義、田中總子、橋本玲子 有毒なクロム（Ⅵ）の代わりにクロム（Ⅲ）を用いた媒染染色をエタノール中で検討した。50℃では媒染は遅く、実用性に乏しいが、100℃での高温高圧法は有効であることがわかった。
39. 蛍光色素を利用した光化学的ビオローゲンカチオンラジカルの生成	共	1989年6月	第31回染色化学討論会	瀬口和義、堀内みゆき、橋本礼子 各種蛍光色素に対し、ビオローゲン、EDTA存在下で照射すると、ビオローゲンカチオンラジカルの生成を確認し、光電子移動が起きていることが証明された。
40. Cr（Ⅲ）による媒染染色—クロムの活性化	共	1989年6月	平成元年繊維学会年次大会研究発表会	瀬口和義、永野淳子、稲村早苗 酸性媒染染料を用いてクロム（Ⅲ）による媒染染色を行ったところ、媒染が遅く実用的ではなかったが、アミノ酸を添加するとクロムが活性化することがわかった。
41. 粘度法によるセルラーゼの活性測定とその応用	共	1989年6月	日本繊維製品消費科学1989年年次大会	横山早美、川上博、瀬口和義、真保理恵子 洗剤中の酵素活性を簡便に測定するため、セルラーゼによるCMCの酵素分解による粘度変化をOstwald粘度管により測定した。その結果粘度変化により酵素反応が追跡できることがわかった。
42. ブリーチアウト衣料による皮膚障害の原因物質の追究	共	1989年5月	日本家政学会第41回大会	瀬口和義、奥野温子、安田武 昭和62年6月ブリーチアウトしたDCブランド綿セーターの着用による皮膚障害が大きな社会問題となった。この原因物質について、化学的に分析した結果、有毒な塩素酸アミドを検出した。
43. カルボニル基を有するオレフィンとPTADとの付加体のSiO <sub>2</sub> による新規な酸化分解	共	1989年	日本化学会第58春季年会	瀬口和義、田中總子 ベンザルアセトンと2分子のPTADとの反応で得られるDiels-Alder付加体はシリカゲル上で分解し、PTAD1分子脱離、酸化を受けたとみられる黄色の物質が得られ、その構造を提案した。
44. 蛍光増白体の蛍光と光退色に及ぼす各種添加物の効果	共	1987年7月	第29回染色化学討論会	瀬口和義、吉田純子、橋本礼子、田中總子 蛍光増白剤の蛍光及び光退色生及ぼす界面活性剤、ポリビニルピロリドンの添加効果を検討した。特にピリジニウム骨格を有するカチオン界面活性剤では蛍光の消光、並びに光退色の抑制という顕著な効果が見られた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
45. 蛍光増白体の蛍光特性に及ぼす添加物の効果	共	1987年6月	日本繊維製品消費科学 昭和62年年次大会	瀬口和義、吉田純子、田中總子 蛍光増白剤の蛍光強度に及ぼす各種添加物の効果を 検討した。カチオン系界面活性剤及びポリビニルピ ロリドンは顕著な効果が見られた。一方、デンブ ンやCMCには添加効果はなかった。
46. エキソ二重結合を有するピシクロ オレフィンと1, 2, 4-トリアゾリ ン-3, 5-ジオンとの付加反応	共	1987年4月	日本化学会第54春季年 会	瀬口和義、広田早苗 ノルボルネン誘導体と1, 2, 4-トリアゾリン-3, 5- ジオンとの反応でエン体、および骨格の転移を伴っ た付加体を与えることを見出した。
47. 塩基性染料の光退色に及ぼすシク ロデキストリンの影響	共	1986年6月	第28回染色化学討論会	牛田智、榊原明子、石本久子、瀬口和義 メチレンブルー及びクリスタルバイオレットの光退 色に及ぼすシクロデキストリンの効果を検討した。 β-シクロデキストリンを添加すると光退色の抑制 が見られた。
48. 酸性媒染染色系における金属の吸 脱着の機構	共	1986年6月	日本繊維製品消費科学 昭和61年年次大会	広田早苗、幡本理恵、瀬口和義 クロム媒染時には媒染染料との結合だけでなく繊維 への吸着も起きていることがクロムの吸脱着実験か ら明らかとなった。特に過剰のクロムを用いたとき は溶出量がかなり多いことがわかった。
49. 電子吸引基を有するオレフィンと 1, 2, 4-トリアゾリン-3, 5-ジ オンとの反応	共	1986年4月	日本化学会第53春季年 会	広田早苗、瀬口和義 電子吸引基を有するオレフィンと1, 2, 4-トリアゾ リン-3, 5-ジオンとの反応を行うと、エン付加体、 [2+2] 付加体を与えた。
50. 7- (置換メチレン) ノルボルネ ン及びそのベンゾ誘導体と1, 2, 4-トリアゾリン-3, 5-ジオンとの 付加反応	共	1986年4月	日本化学会第52春季年 会	瀬口、広田、W. Adam, H. Walter 7位にメチレン基を有するノルボルネン及びそのベン ゾ誘導体と1, 2, 4-トリアゾリン-3, 5-ジオンとの反 応では、転移物, Diels-Alder, [2+2]型の生成物を 得た。
51. 塩化鉄(Ⅲ)存在下でのオレフィ ン誘導体の光化学反応	共	1984年4月	日本化学会第49春季年 会	広田早苗、瀬口和義 芳香族オレフィンに対して、塩化鉄存在下光照射し た。生成物はケトン、アルコール、二量体、アミド であった。この反応はカチオンラジカルを経由して 進むと考えた。
52. ジケトンオキシムエーテルの金属 イオン存在下での光化学反応	共	1984年4月	日本化学会第49春季年 会	瀬口和義、石川晃子 ジケトンオキシムエーテルに対して、塩化鉄存在下 光照射した。生成物はジケトン、ケトンモノオキシ ムであった。反応はカチオンラジカルを経由して起 きると推定した。
53. アゾベンゼン誘導体の熱異性化	共	1984年10月	第10回繊維連合研究発 表会	広田早苗、明石温子、瀬口和義 アゾベンゼン類のシス体からトランス体への熱異性 化について、置換基効果、溶媒効果、触媒効果から 検討した。ヒドロキシ基、アミノ基を持つものでは 溶媒効果や触媒効果が大きかった。
54. 鉄(Ⅲ)イオン存在下、オキシム 及びオキシムエーテルの光酸化反 応	共	1983年4月	日本化学会第47春季年 会	瀬口和義、広田早苗 オキシム及びオキシムエーテルに対して塩化鉄存在 下光照射した。生成物はアルデヒド、ケトンが高収 率で得られた。反応はカチオンラジカルを経由して 起きると推定した。
55. 塩化鉄(Ⅲ)による芳香族光置換 反応	共	1983年4月	日本化学会第47春季年 会	瀬口和義、広田早苗 臭素置換芳香族に対して、塩化鉄(Ⅲ)存在下光照 射すると臭素が塩素に置換されることを見出した。 同様にニトロ基についてもニトロ基が塩素に置換さ れたことがわかった。
56. 蛍光染料の蛍光強度に及ぼす界面 活性剤効果	共	1983年11月	日本家政学会関西支部 第4回研究発表会	広田早苗、榎原代志子、瀬口和義 蛍光増白剤の蛍光強度に及ぼす界面活性剤の効果を 検討した。ピリジニウム骨格を有するカチオン界面 活性剤では蛍光の消光が起きることを見出した。
57. 次亜塩素酸ナトリウムによる染色 フィルムの漂白に関する研究	共	1982年9月	日本家政学会第34会年 次大会	瀬口和義、杉本君代 次亜塩素酸ナトリウムによる漂白について、固相で の検討を行うため、各種染色フィルムを用いて検討 した。溶液相での漂白と同じようにpH効果が見ら れたが、漂白速度はかなり遅いことがわかった。
58. 金属イオンを用いた光酸化反応	共	1982年4月	日本化学会第45春季年 会	瀬口和義、広田早苗、山本厚子 共役ビニルケトンを経質として、塩化鉄存在下で光 照射すると、1,2-ジハロゲン化物が生成した。反応 は塩素ラジカルを経由する可能性を指摘した。
59. 塩化第二鉄存在下、芳香族エーテ ル類の光酸化反応機構	共	1982年4月	日本化学会第45春季年 会	瀬口和義、広田早苗 塩化第二鉄存在下、芳香族エーテル類の光酸化の反 応のメカニズムを明らかにするため、ジアステレマ ーを有する芳香族エーテル、又はチオエーテルを用 いて検討した。反応はカチオンラジカルを経て進行 すること及びカチオンラジカルの分解はケージ内 であることがわかった。
60. ケイ光染料からのケイ光強度に及 ぼす各種界面活性剤の効果	共	1982年10月	日本家政学会第34会年 次大会	瀬口和義、広田早苗 ケイ光増白剤のケイ光強度に及ぼす界面活性剤の効

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
61. 金属イオン存在下ピナコールの光酸化反応	共	1982年10月	第13回中部化学関係学協会支部連合秋季大会	果を検討した。界面活性剤のイオンの性質により、特に c m c 付近から、強度の増大、又は減少が見られた。 瀬口和義、広田早苗 ピナコールに対して、塩化鉄存在下光照射すると、対応するケトンが得られた。反応はカチオンラジカルを経て進行すると推定した。
62. 金属塩存在下でのエポキシドの光反応	共	1982年10月	第13回中部化学関係学協会支部連合秋季大会	瀬口和義、広田早苗 芳香族エポキシドに対して、アセトニトリル中塩化鉄に存在下での光分解を検討した。生成物はアルデヒド、ケトン、二量体が得られた。この反応はカチオンラジカルを経て進行すると推定した。
63. 次亜塩素酸漂白に及ぼすミセル効果 漂白の場	共	1981年9月	日本家政学会第33会年次大会	瀬口和義、磯井佳子 有機アンモニウムイオンの存在下次亜塩素酸ナトリウムによるイオン性染料の漂白及びベンゼン中での漂白を検討した。添加したアンモニウムイオンは漂白を著しく促進することがわかった。これを漂白の場という概念で考察した。
64. 解離型染料（モデル汚れ）の有機溶剤中への溶解に及ぼす界面活性剤の効果	共	1981年6月	日本繊維製品消費科学 昭和56年次大会	瀬口和義、磯井佳子 ベンゼン中へのイオン性の染料（モデル汚れ）の溶解に対する界面活性剤の効果について検討した。少量の水の添加が溶解度の著しい増大をもたらした。この結果を逆ミセルとの関連で考察した。
65. 含水アセトニトリル中での塩化鉄による芳香族エーテルの光分解	共	1981年4月	日本化学会第43春季年会	瀬口和義、広田早苗 塩化鉄存在下、含水アセトニトリル中で芳香族エーテルの光分解を検討した。その結果、アルコール、アルデヒド、アミドが生成することがわかった。反応はエーテルと鉄イオンとの間で電子移動がおきることから始まると推定した。
66. 塩化鉄（Ⅲ）による活性メチレンの光酸化反応	共	1981年10月	日本化学会第44秋季年会	瀬口和義、山本厚子、広田早苗 メチレン基を含む芳香族炭化水素に対し、アセトニトリル中で、塩化鉄存在下光照射したところ、ケトン、アルコール、アミド、ハロゲン化物が得られた。その反応は塩素ラジカルによるものと推定した。
67. アセトニトリル中での塩化鉄（Ⅲ）による芳香族チオエーテルの光分解		1981年10月	日本化学会第44秋季年会	瀬口和義、広田早苗 塩化鉄存在下、アセトニトリル中で芳香族チオエーテルの光分解を検討したところ、アルデヒド、ジスルフィドが生成した。チオエーテルと鉄イオンとに電子移動が起きることから反応すると推定した。
68. 各種酸性染料の光分解に及ぼす金属イオン効果	共	1980年6月	第22回染色化学討論会	瀬口和義、湯浅栄、今津香代子 4種の染料に対して、15種の金属イオン存在下、光照射し光分解に及ぼす金属イオンの効果を検討した。金属の酸化作用による促進、錯体形成による抑制が重要であることがわかった。
69. 次亜塩素酸ナトリウムによる色素漂白に及ぼす界面活性剤の効果	共	1980年6月	日本繊維製品消費科学 昭和55年次大会	瀬口和義、森川桜子、山崎香 各種水溶性染料に対して次亜塩素酸のナトリウムによる漂白を界面活性剤の添加効果を中心に速度論的取り扱いから検討した。その結果、カチオン界面活性剤では100倍程度の速度の増大が認められた。
70. ポリクロロビシクロ [2.2.1] ヘプテン-2誘導体の <sup>13</sup> Cケミカルシフト	共	1980年4月	日本化学会第41春季年会	世良明、中村美智子、高木和裕、瀬口和義 高圧下でのDiels-Alder反応の研究の一環として表題の化合物の炭素のNMRのケミカルシフトを解析した。
71. アントラキノン誘導体の濃硫酸中における水酸化反応	共	1980年10月	日本化学会第42秋季年会	瀬口和義、池山博美 クロロ置換アントラキノンに対して、濃硫酸中で光照射すると、脱塩素を伴った水酸化反応が起きることを見出した。
72. フェニルエステル類のフェノリスに及ぼすミセル効果	共	1980年10月	日本化学会第42秋季年会	瀬口和義、岡本尚子、上田奈穂美 ニトロフェニルアセタート及びヘキサノエートのフェノリス速度に及ぼす界面活性剤の効果を検討した。カチオン系活性剤で著しい速度増加（27倍）が認められた。その原因は界面活性剤ミセルへの基質の取り込みによるものと考えた。
73. 樹脂加工布からのホルムアルデヒド量に及ぼす環境因子の研究（第3報）	共	1979年6月	日本繊維製品消費科学 昭和54年次大会	瀬口和義、山口京子、池山博美 衣料から発生するホルムアルデヒドについて、温度、湿度の影響について速度論的取り扱いから検討した。温度、湿度の上昇により発生するホルムアルデヒドは増大することがわかった。
74. 次亜塩素酸ナトリウムによる色素の漂白過程の研究	共	1979年6月	日本繊維製品消費科学 昭和54年次大会	瀬口和義、山崎香 次亜塩素酸ナトリウムによる水溶性染料の漂白を速度論的に取り扱い p H効果、界面活性剤の添加効果から検討し、漂白過程について考察した。
75. 置換ニトロフェノール類の可視スペクトルおよび酸性度に及ぼす界面	共	1979年4月	日本化学会第40春季年会	瀬口和義、柳川千枝 p-置換-o-ニトロフェノールの酸性度に及ぼす界面

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
面活性剤の効果				活性剤の効果を検討した。置換基としてカーボアルコキシ基(CO <sub>2</sub> R)を用いた。カチオン界面活性剤では、ニトロフェノレートイオンによる吸収が長波長シフト、深色効果を示し、大きな酸性度の低下が見られた。
76. 濃硫酸中での置換アントラキノンの光化学反応	共	1979年4月	日本化学会第40春季年会	瀬口和義、池山博美 濃硫酸中でアントラキノン誘導体に光照射すると、ヒドロキシル基が導入されることがわかった。
77. アゾ染料の光退色に及ぼす金属カチオンの効果	共	1978年11月	第8回繊維連合研究発表会	瀬口和義、今津香代子 アゾ染料の光退色に及ぼす金属イオンの添加効果を検討した。Ni <sup>2+</sup> 、Mn <sup>2+</sup> 、Hg <sup>2+</sup> ではほとんどの染料に対して、光退色を促進した。Cu <sup>2+</sup> では染料に対して特異性が認められた。染料との錯体形成、電子移動反応が大きな寄与をしていることが示唆された。
78. 酸性染料による溶剤染色の染着挙動—アルコールの効果—	共	1978年11月	第8回繊維連合研究発表会	瀬口和義、山口篤子、櫻野照子 水—アルコール系での酸性染料のポリアミド繊維に対する染着挙動を染料構造、アルコールの種類から検討した結果、これらの違いによって、染着機構が異なることを見出した。
79. 濃硫酸中での芳香族カルボニル化合物の光反応(1) 置換9, 10-アントラキノン	共	1978年11月	日本化学会中国四国九州支部合同大会	瀬口和義、池山博美 濃硫酸中でのアントラキノン誘導体の光反応を分光光度計で追跡した。反応はプロトン化アントラキノンを経由して起きることがわかった。生成物はヒドロキシアントラキノンであった。
80. 色素と蛋白質との相互作用について—アルコールの添加効果—	共	1977年6月	繊維学会昭和52年年次大会研究発表会	櫻野照子、瀬口和義 血清アルブミンと酸性染料との結合を透析平衡法を用いて、アルコールの添加効果を検討した。アルコールの添加により疎水性相互作用が低下することが示唆された。
81. 解離型染料を用いた溶媒染色—新しい助剤—クラウンエーテル	共	1977年6月	繊維学会昭和52年年次大会研究発表会	瀬口和義、井村和子 酸性染料を用いた溶剤染色では溶媒の極性低下が染料の溶解度の低下をきたすことから、染色助剤としてクラウンエーテルを用いて検討したところ、有効であることがわかった。
82. 置換フェノールの酸性度に及ぼす界面活性剤の効果	単	1977年4月	日本化学会第36春季年会	瀬口和義 置換ニトロフェノールの酸性度に及ぼす界面活性剤の添加を検討したところ、カチオン界面活性剤の添加により大きな酸性度の低下が認められた。ニトロフェノレートイオンのミセルへの取り込みによる安定化作用によると結論した。
83. 直接染料の染着に及ぼす非プロトン溶媒の効果	共	1976年5月	第18回染色化学討論会	瀬口和義、寺本美智子、櫻野照子 2種の直接染料によるセルロースの染色に及ぼす3種の双極性非プロトン溶媒の効果を検討した。双極性非プロトン溶媒を添加すると染着量の著しい低下が見られた。その原因として染料に対する溶媒和が関係していると考えた。
84. 解離型染料の染着に及ぼす溶媒効果(第2報) 等温吸着曲線からの検討	共	1976年4月	日本化学会第34春季年会	瀬口和義、櫻野照子 メタノール—トリクレン系で酸性染料によるナイロンの染着に関する等温吸着曲線の解析から、ラングミュラー型と分配型の和となっていることがわかった。
85. 酸性染料のナイロンへの吸着に及ぼす有機溶媒の添加効果(第4報)	共	1976年11月	繊維学会昭和51秋季研究発表会	瀬口和義、櫻野照子 アルコール—水系で酸性染料によるナイロンの染着挙動から、染着量に及ぼす溶媒効果を検討した。染着量はアルコールの添加割合が高くなると放物線になることがわかった。
86. 解離型染料の染着に及ぼす溶媒効果(第5報) 酸性染料—ナイロン系	共	1976年11月	繊維学会昭和51秋季研究発表会	瀬口和義、櫻野照子、伊藤美保子 各種溶媒中で、酸性染料—ナイロン系の染色を行い、染着量に及ぼす溶媒効果を検討した。染着量はプロトン溶媒の場合極性パラメーターとに相関があるが、非プロトン溶媒の場合には相関は見られなかった。
87. 解離型染料の染着に及ぼす溶媒効果(第1報)	共	1975年10月	第7回繊維連合研究発表会	瀬口和義、櫻野照子 非水系で酸性染料によるナイロンの染着挙動から、染着量に及ぼす溶媒効果を検討した。メタノール—パークレン系で染色が可能であること、さらに強い有機酸を添加すると染着量は増大することがわかった。
88. Diels-Alder反応における反応性と選択性との相関	共	1974年4月	日本化学会第30春季年会	瀬口和義、世良明、大槻芳伸、丸山和博 置換シクロペンタジエンとオレフィンとのDiels-Alder反応の生成物のexo:endoの選択性と反応性との相関を検討したところ、反応性が高いものほど選択性が大きいことがわかった。
89. Diels-Alder反応の圧力効果 反応性と遷移状態の位置との相関	共	1973年4月	日本化学会第28年会	瀬口和義、世良明、丸山和博 シクロペンタジエンとオレフィンとのDiels-Alder反応の反応性と活性化体積との相関を検討し、活性化

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
90. Diels-Alder反応における反応性と選択性との相関	共	1972年10月	第14回高圧討論会	体積が遷移状態の位置を表すこと、二次的な相互作用が体積収縮の原因となることを見出した。 瀬口和義、世良明 シクロペンタジエンとオレフィンとのDiels-Alder反応の生成物のexo: endo 比と反応の圧力効果から得られる活性化体積との相関を検討し、活性化体積が遷移状態の位置を表す尺度になりうることを提案した。
91. アニソールの塩素化に対する溶媒及び圧力効果	共	1970年4月	日本化学会第23年会	瀬口和義、浅野努、世良明、後藤良造 芳香族親電子置換反応の中でアニソールに対する塩素化を取りあげ、生成物の異性体比に及ぼす溶媒および圧力効果について検討し、遷移状態に対する溶媒和の重要性を指摘した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. di- $\pi$ -methane転位	単	1996年11月	有機合成化学協会誌 4巻	5 表題の内容について解説した。
2. ウアラウブに徹する	単	1987年	武庫川学院学園通信 0号	4 随筆 ドイツでの思い出③
3. 西独流の先輩と後輩	単	1986年	武庫川学院学園通信 9号	3 随筆 ドイツでの思い出②
4. 郷に入れれば郷に従え	単	1986年	武庫川学院学園通信 8号	3 随筆 ドイツでの思い出①
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 生命倫理に基づく環境と生命の科学的研究	共	2005年	大学院整備重点化経費（研究科特別補助）	瀧井（代表）、牛田、小野木、瀬口
2. 生命倫理に基づく環境と生命の科学的研究	共	2004年	大学院整備重点化経費（研究科特別補助）	瀧井（代表）、牛田、小野木、瀬口
3. 生命倫理に基づく環境と生命の科学的研究	共	2003年	大学院整備重点化経費（研究科特別補助）	瀧井（代表）、牛田、小野木、瀬口
4. 染色文化財の展示、保存、管理に関する基礎的研究	共	1998年	科学研究費補助金 基盤研究B（分担）	齋藤（代表）、片山、瀬口、牛田、小原、馬越、佐野、生野、谷田貝
5. 快適な衣環境を構築するための総合科学的研究	共	1998年	大学院重点特別経費（研究科共同研究）	瀬口（代表）、川西、小野木、伊佐治、藤田、地主
6. 染色文化財の展示、保存、管理に関する基礎的研究	共	1997年	科学研究費補助金 基盤研究B（分担）	齋藤（代表）、片山、瀬口、牛田、小原、馬越、佐野、生野、谷田貝
7. 快適な衣環境を構築するための総合科学的研究	共	1997年	大学院重点特別経費（研究科共同研究）	瀬口（代表）、川西、小野木、伊佐治、藤田、地主
8. 快適な衣環境を構築するための総合科学的研究	共	1996年	大学院重点特別経費（研究科共同研究）	瀬口（代表）、川西、小野木、伊佐治、藤田、地主
9. 洗剤および染料の環境中における消失	共	1996年	科学研究費補助金 基盤研究A（分担）	片山（代表）、阿部、小林、田川、藤井、生野、瀬口、大浦
10. 洗剤および染料の環境中における消失	共	1995年	科学研究費補助金 総合研究A（分担）	片山（代表）、阿部、小林、田川、藤井、生野、瀬口、大浦
11. PTAD付加体（ウラゾール）を活用した多環性ヘテロ環化合物の合成と生理活性の研究	単	1993年	科学研究費補助金 一般研究C	一
12. 生活環境保全を目的とした新しい洗浄システムの開発に関する研究	共	1992年	科学研究費補助金 総合研究A（分担）	総 藤井（代表）、阿部、片山、川瀬、山田、所、瀬口、杉原、田川、岡田、宮本
13. 多環式高歪みアゾ化合物のアルゴンレーザー光分解の研究	単	1987年	科学研究費補助金 一般研究C	一
14. 濃硫酸中での共役ジケトン <small>の</small> 光化学反応	単	1981年	科学研究費補助金 一般研究C	一
15. 色素の構造と多官能性高分子化合物との分子間相互作用に関する研究	単	1976年	科学研究費補助金 奨励研究A	奨

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2010年1月～現在	日本家政学会
2. 2003年6月～2012年5月	繊維学会 評議員
3. 2000年1月～現在	日本分析化学会
4. 1989年1月～現在	日本薬学会

学会及び社会における活動等

年月日	事項
5. 1976年4月～現在	繊維学会
6. 1969年1月～現在	日本化学会